

社会制度と心の文化差

鈴木直人・矢原耕史・山岸俊男

キーワード：分析的認知，包括的認知，評判

目的

本研究の目的は、人々が経験する社会的状況の種類に応じて、異なる心理傾向や認知スタイルが顕在化することを示すことにある。具体的には、認知・心理の指標として、欧米で優勢とされる相互独立的自己観および分析的認知と、東アジアで優勢とされる相互協調的自己観および包括的認知 (Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001) に注目し、従来、文化心理学者によって指摘されてきた文化差が、異なる制度のもとでの適応戦略の差として説明可能であることを示す。特に本研究では、「個人主義型」および「集団主義型」という2種類の社会秩序のあり方を想定し、特定の社会制度が、それに対応した認知ないし思考のスタイルを形成するという仮説を検討する。

ここにいう「個人主義型」の社会とは、各人が独立した個人として意思決定し、所属集団を超えて関係を拡張していく社会を指す。一方、「集団主義型」の社会とは、集団内に張り巡らされた情報のネットワーク（評判システム）を社会秩序の基盤とする社会であり、集団内部の相互監視が発達した社会を想定している。

Nisbett らによれば、包括的認知とは全体的背景に注目し、人の行動や事物の動きを理解する際に、対象と背景との関係性を重視する認知のスタイルである。本研究は、社会関係のネットワークが密な社会においてこそ、関係性を重視する包括的認知スタイルを獲得することが適応価値をもつとする観点から、社会制度と心の文化差の関係を解明することを目指す。本研究では実験室内に2種類の社会制度を作り出すため、以下に述べる実験を実施した。